

ちゃ や い せき  
茶 屋 遺 跡

携帯電話無線基地局建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2002. 3

宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会

## 序

この報告書は、携帯電話無線基地局建設事業に伴い、平成12年度に佐土原町教育委員会が主体となり調査した茶屋遺跡発掘調査報告書です。

佐土原町では、開発事業が計画される地域の埋蔵文化財調査を事前にを行い、先人の残した遺跡や道具など文化財の調査・保護と啓発に努めています。

今回の発掘調査地は、中世・近世期の街道沿いにあったと考えられている「茶屋遺跡」であり、また、それ以前の人々の生活を解明する上で重要な遺跡であると考えています。

この調査の結果、佐土原における古代からの歴史を紐解くための情報も得ることができました。

この報告書が、佐土原の歴史を考察・研究する上での基礎となり、文化財への理解と認識を深め、教育・研究の場等で幅広くご活用いただければ幸いでございます。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、関係各位よりいただきましたご指導・ご協力に対し心よりお礼申し上げます。

平成14年3月

佐土原町教育委員会

教育長 菊池俊彦

## 例　　言

1. 本書は、携帯電話無線基地局建設事業に伴う「茶屋遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、ジェイフォン西日本株式会社の依頼を受け、佐土原町教育委員会が主体となり、平成12年度に行った。
3. 発掘調査は平成12年10月23日から11月10日まで行った。
4. 空中写真撮影は、九州航空株式会社が行った。
5. 本書に使用した位置図などは、国土地理院発行の縮尺2万5千分の1地形図を基に作成した。
6. 出土遺物は、佐土原町教育委員会（佐土原町出土文化財管理センター）で保管している。
7. 色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」による。
8. 方位は、磁北、レベルは海拔高である。
9. 地形・地質については、宍戸地質研究所 宍戸 章氏の指導を受けた。
10. 本書の執筆・編集は、社会教育課文化財係主査 木村明史が担当した。

## 本文目次

第1章 はじめに	13
第1節 調査に至る経緯	13
第2節 調査の組織	13
第3節 遺跡の位置と環境	14
第2章 茶屋遺跡の調査	18
第1節 調査の概要	18
第2節 基本層序	18
第3節 遺構	24
第4節 遺物	24
第3章 まとめ	34

## 挿図目次

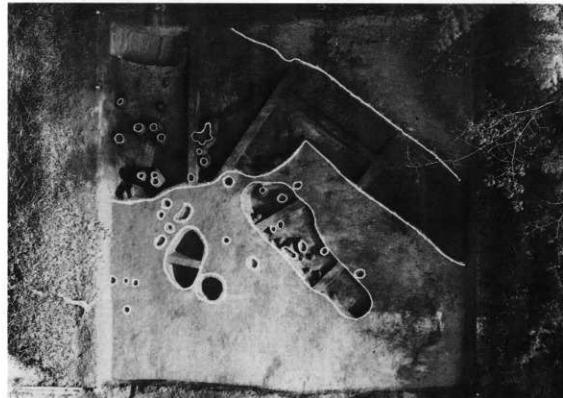
第1図 茶屋遺跡の位置と周辺の遺跡	15
第2図 茶屋遺跡の周辺地形図	16
第3図 茶屋遺跡の調査範囲	17
第4図 茶屋遺跡基本土層図	18
第5図 茶屋遺跡遺構平面図及び遺物分布図	19
第6図 茶屋遺跡南西壁・南東壁土層断面図	20
第7図 茶屋遺跡土層断面図(P1・2・3)	21
第8図 茶屋遺跡土層断面図(P4・5)	22
第9図 茶屋遺跡土層断面図(P6・7)	23
第10図 茶屋遺跡出土遺物実測図	26
第11図 茶屋遺跡出土遺物実測図	27
第12図 茶屋遺跡出土遺物実測図	28
第13図 茶屋遺跡出土遺物実測図	29
第14図 茶屋遺跡出土遺物実測図	30
第15図 茶屋遺跡出土遺物実測図	31

## 表 目 次

第1表 茶屋遺跡出土遺物観察表(石器)	32
第2表 茶屋遺跡出土遺物観察表(土器)	33

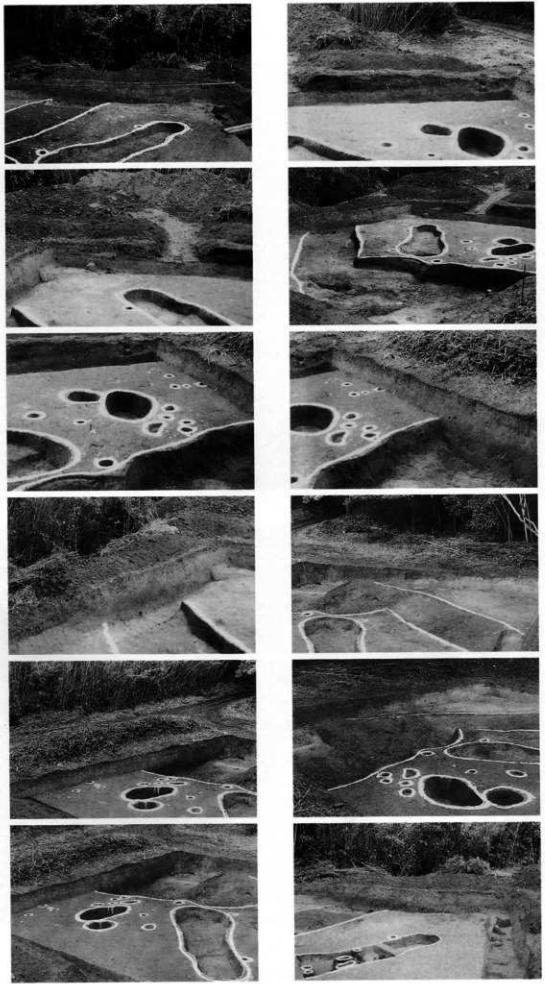
## 図版目次

図版1 茶屋遺跡全景写真	1
図版2 茶屋遺跡遺構(1)	2
図版3 茶屋遺跡遺構(2)	3
図版4 茶屋遺跡作業風景(1)	4
図版5 茶屋遺跡作業風景(2)	5
図版6 茶屋遺跡出土遺物	6
図版7 茶屋遺跡出土遺物	7
図版8 茶屋遺跡出土遺物	8
図版9 茶屋遺跡出土遺物	9
図版10 茶屋遺跡出土遺物	10
図版11 茶屋遺跡出土遺物	11
図版12 茶屋遺跡出土遺物	12



茶屋遺跡全景写真

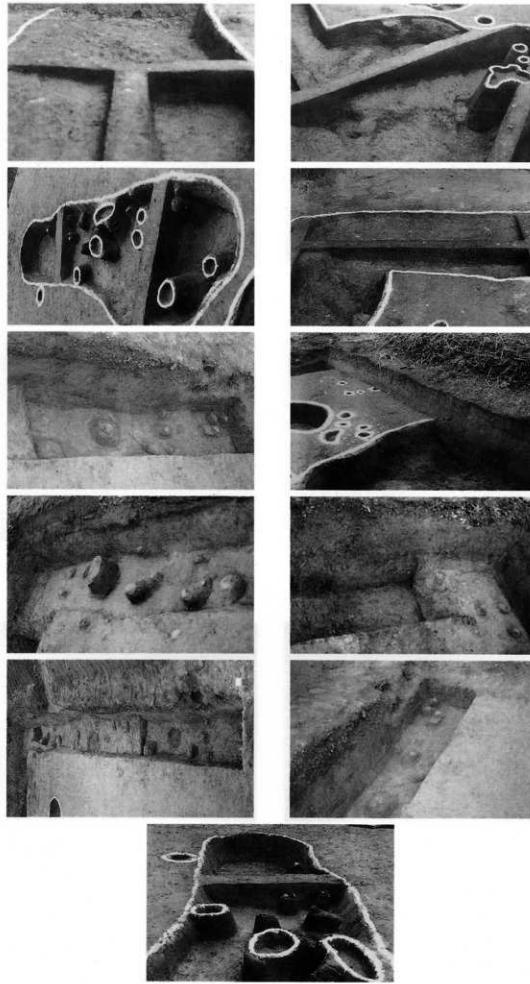
図版2



茶屋遺跡遺構(1)

-2-

図版3



茶屋遺跡遺構(2)

-3-

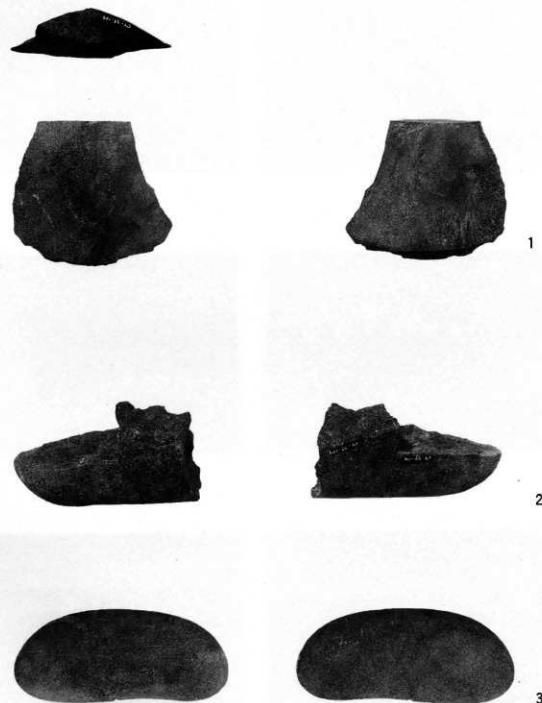


茶屋遺跡作業風景(1)



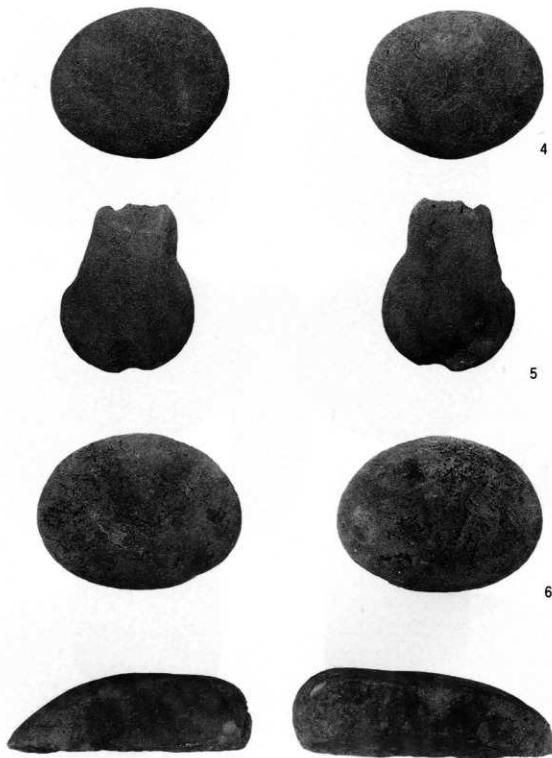
茶屋遺跡作業風景(2)

图版6



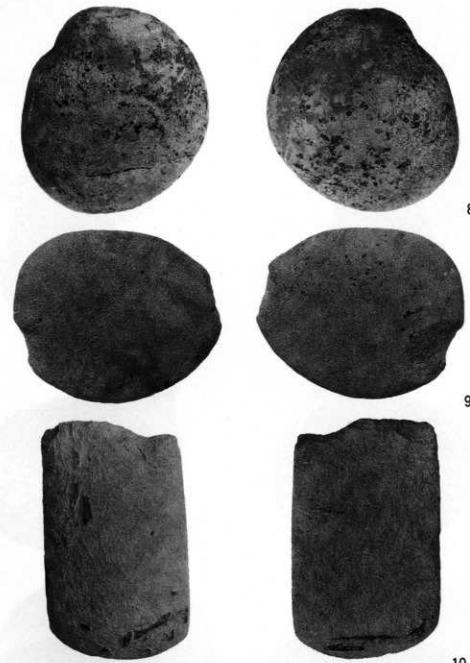
茶屋遺跡出土遺物

图版7



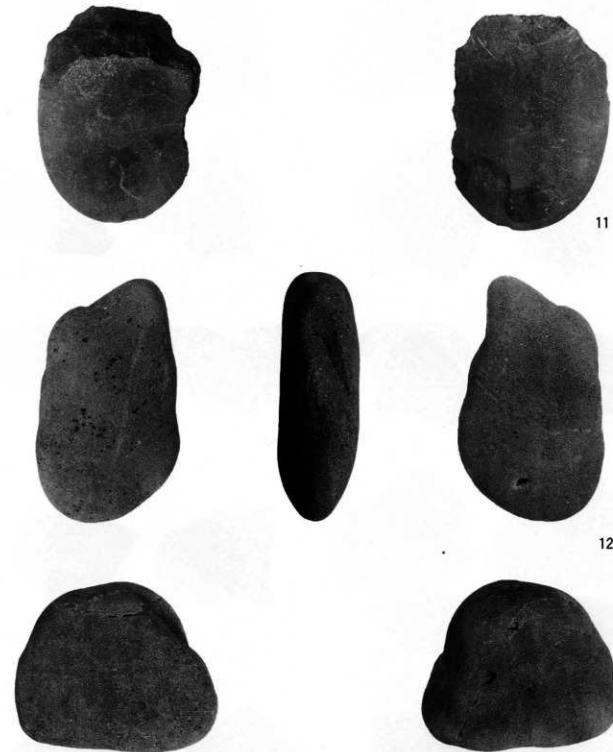
茶屋遺跡出土遺物

図版8



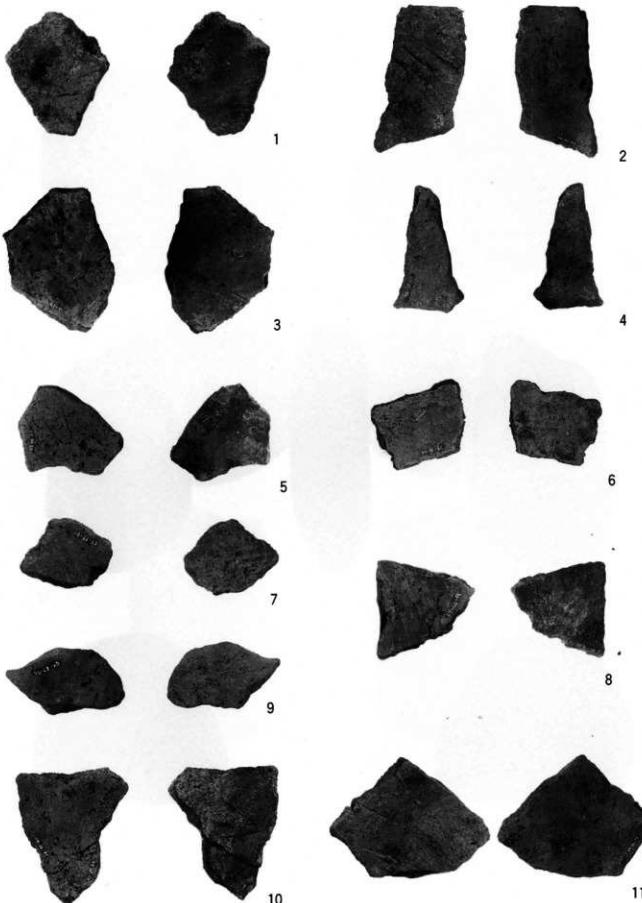
茶屋遺跡出土遺物

図版9



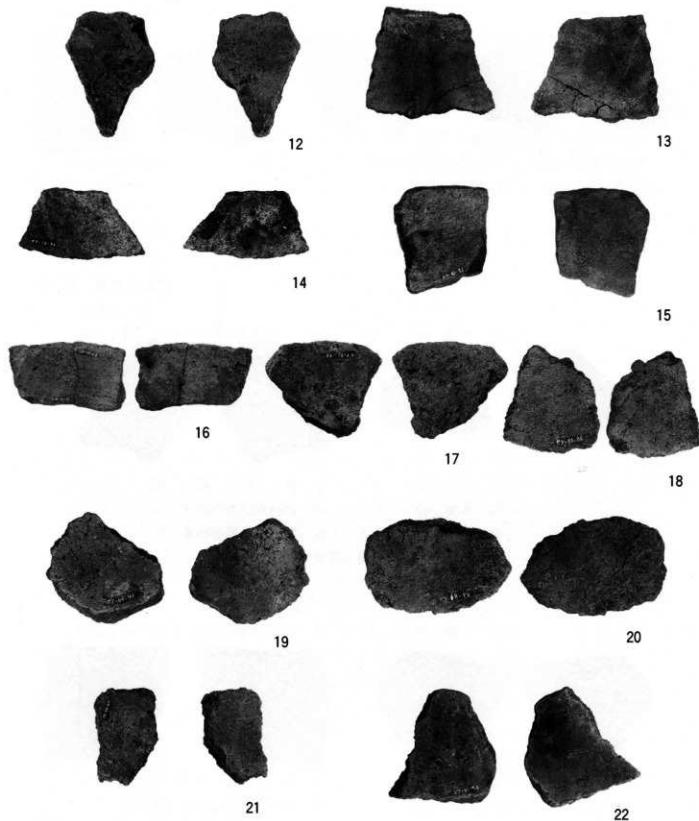
茶屋遺跡出土遺物

図版10



茶屋遺跡出土遺物

図版11



茶屋遺跡出土遺物



茶屋遺跡出土遺物

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

近年の情報通信社会の急速な発展に伴い、携帯電話無線基地局の増設が各地で行われているが、今回、基地局の建設予定地として挙げられた地点が佐土原町内文化財保蔵地「茶屋遺跡（3005）」にあたるため、町教育委員会とジェイフォン西日本株式会社との協議の結果、遺跡の現状保存は困難であることから、佐土原町教育委員会を主体として記録保存を目的とする発掘調査を行うこととした。

確認調査は、3本のトレーナーを設定して行った。結果、柱穴状遺構3箇所と弥生期の土器約20点の出土を確認した。このことを受けてジェイフォン西日本株式会社との協議の結果、遺跡の現状保存は困難であることから、佐土原町教育委員会を主体として記録保存を目的とする発掘調査を実施することとなった。

調査対象地は雑種地で、調査期間は平成12年10月23日から同年11月10日までである。

### 第2節 調査の組織

平成12年度

調査主体	佐土原町教育委員会	教 育 長	菊池 俊彦
		社会 教育 課長	郡司 利文
		社会教育課長補佐	河越 弘明
庶 務 担 当	文化 財 係	長 東 浩一郎	
々	主 査	黒木 直英	
々	事 業	櫛間 史朗	
調 査 担 当	主 査	木村 明史	
佐土原城跡歴史資料館	館 長	赤木 達也	
出土遺物整理員	増田 道子（8月まで）・田中 智子・一色 尚子		
	山口千恵美・黒木登季子（10月から）		

平成13年度

調査主体	佐土原町教育委員会	教 育 長	菊池 俊彦
		社会 教育 課長	松崎 直彦
		社会教育課長補佐	年見 秀雄
庶 務 担 当	文化 財 係	長 東 浩一郎	
々	主 査	黒木 直英	
々	事 業	櫛間 史朗	
調 査 担 当	主 査	木村 明史	
佐土原城跡歴史資料館	館 長	赤木 達也	
出土遺物整理員	田中 智子・日高 尚子・山口千恵美（7月まで）		
	黒木登季子・庄境 美紀（9月から）		

### 第3節 遺跡の位置と環境

まず、地理的環境として、茶屋遺跡（7）の所在する佐土原町は、宮崎県海岸沿いのほぼ中央に位置する。東側を日向灘に面し、北側を新富町、西側を西都市・国富町、南側を宮崎市に接しており、町域面積の大半を山地が占めている。地形はその特徴から、都於郡・仲間原台地・船野台地・年居台地と鹿野田・上田島丘陵・佐土原丘陵と一つ瀬川低地・広瀬海岸低地・那珂低地に区分することができる。東部海岸沿いには、平野が南北に広がっており、町の北側には一つ瀬川、中央部には石崎川が流れ、石崎川水系である井上川、亀田川、下村川、新宮川が支流として山地をぬっている。茶屋遺跡（7）は、佐土原城跡（9）の東側を通る祇街道沿いに位置している。

次に、歴史的環境として、台地の遺跡は主に先史時代の遺跡で占められている。時代は、旧石器時代前期から縄文時代の間である。特に船野台地では、旧石器時代後期に相当する船野遺跡から細石器文化を代表する船野型石核が出土している。また、下屋敷遺跡（4・5）では、旧石器時代後期の縄群遺構が33基以上検出され、遺物はナイフ型石器・剥片尖頭器・スクレイパー・石核・敲石・磨石などが出土している。都於郡・仲間原台地の中央に位置する西ヶ迫遺跡（1）・桜原遺跡（2）・山内遺跡（3）では、縄文時代早期の炉穴などが65基以上検出されているが、これは九州においても異例の多さである。出土遺物は、貝殻円筒土器・無文土器などである。

次に、丘陵地帯は、戸入火碎火堆堆積物により大半が築かれており縄文時代後期以降の遺跡が残っている。佐土原丘陵西北部では、隱山遺跡（9）（平成4年8月～12月発掘調査）が確認されており、遺構は縄文草創期の集石遺構、中世期から近世期にかけての寺院跡が検出されている。遺物としては、縄文草創期から弥生期にかけての土器、中世期から近世期にかけての陶磁器、瓦堂などである。古城第1遺跡（8）（平成5年1月～2月発掘調査）では、中世期の城館跡の遺構が検出されている。遺物は、陶磁器が数点出土した。佐土原丘陵西部には、大光寺・高月院・崇教寺・吉祥寺・松巖寺・誓願寺・多楽院などの中世期からの寺院が多数残っている。同じ丘陵西部において平成3年度より発掘調査が行われ、下村窯跡群（10）が確認された。この窯跡からは、日向国分寺や日向國府推定地である寺崎遺跡（西都市大字右松字寺崎）出土の瓦と同系統のものが出土しており、これらの遺跡との需給関係が推測される。佐土原丘陵中央部から南部にかけては、古墳時代の横穴墓である広瀬村古墳群（①～②）が数多く残っている。鹿野田・上田島丘陵にも古墳時代の横穴墓である佐土原町古墳群（③～⑧）が多数ある。

最後に低地においては、広瀬海岸低地の伊賀給遺跡（11）が平成9年6月からの発掘調査で弥生時代後期から中世にかけての水田跡であると確認された。特に弥生時代後期の水田跡は小区画53枚が検出されている。遺物としては、木材（推定年代3,500年前）・弥生土器・土師器片などが出土している。

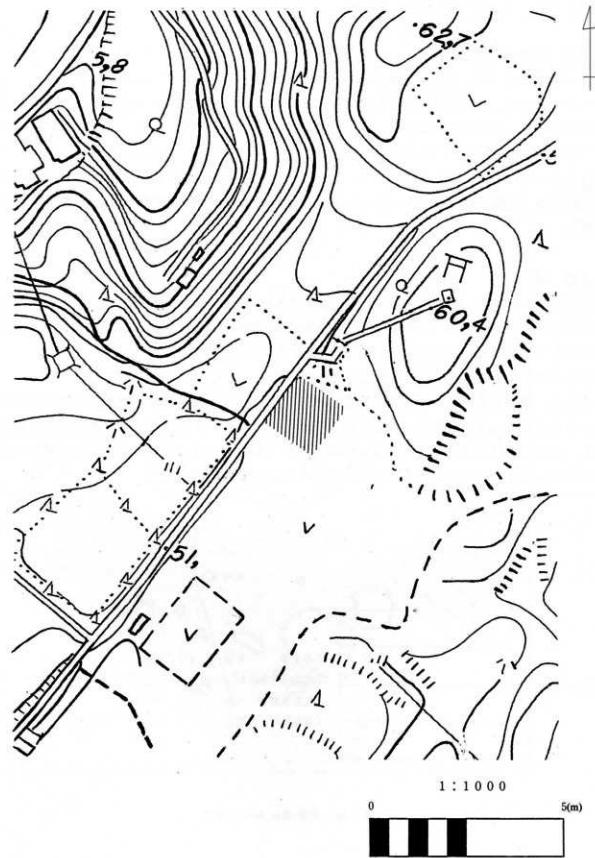


① 図 本遺跡の位置と周辺道路

第1図 本遺跡の位置と周辺道路



第2図 茶屋遺跡の調査範囲及び周辺地形図



第3図 茶屋遺跡の調査範囲

## 第2章 茶屋遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

調査地及び周辺は、佐土原丘陵の北西側先端部に位置し、標高は約50mの地点である。通常この辺りの地質は、入戸火碎流堆積物を基盤に、Ah（アカホヤ火山灰）とKb（小林軽石）が上下に堆積している。東側の丘陵谷部は、小丸川層及び通山層（泥・砂及び礫）、また南側丘陵縁辺部は佐土原層（泥岩優勢互層）によって形成されている。調査地の現況は山林で、調査は重機（バケット付きバックホー）により表土を剥ぎ、約50cm下から遺構面を検出した。第3層の遺構検出層は、掘立柱跡40・性格不明土壙4で、出土遺物は瓦1点・弥生土器56点・弥生石器46点の計103点が出士した。

### 第2節 基本層序

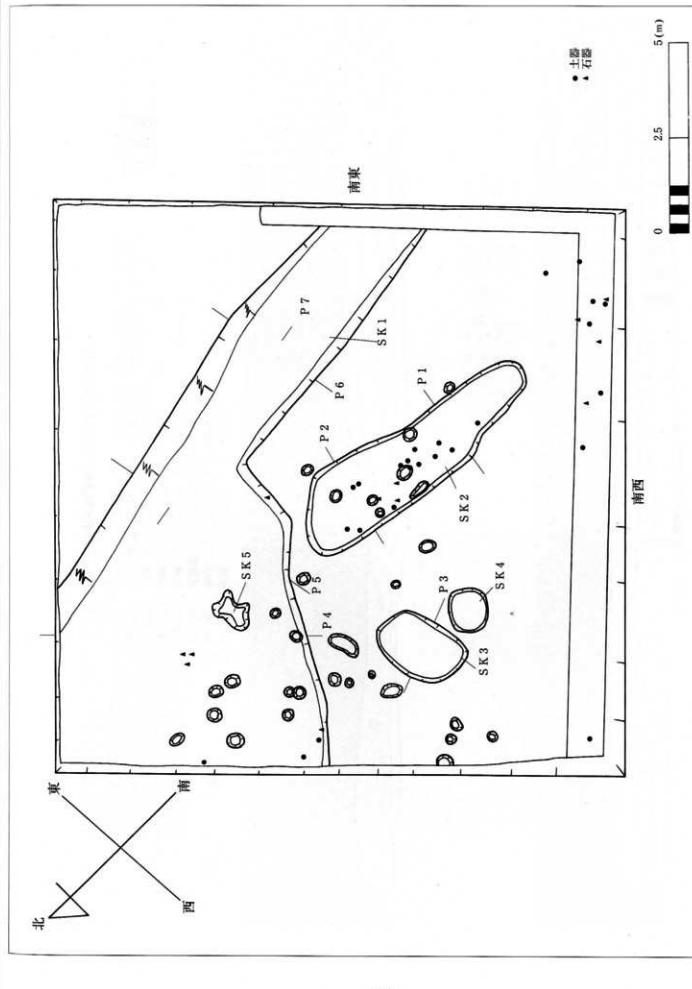
調査地及び周辺は、鹿野田・上田鳥丘陵地に位置し、通常入戸火碎流のアカホヤ火山灰（約6,500年前の降下火山灰。Ah）、小林軽石（約16,000年前の降下火山灰。Kb）、入戸火碎流（約25,000年前の降下火山灰。）の3つのテフラの堆積が確認できる。

調査の層序は、第1層から第4層に分層した。

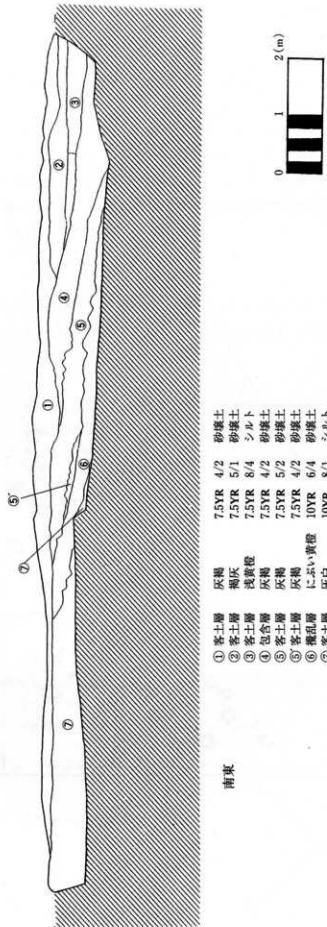
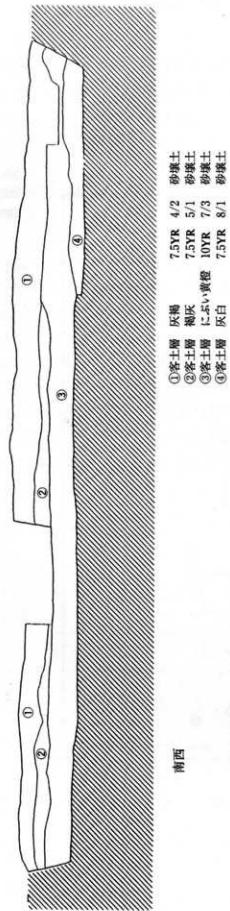
内訳は、第1層表土層・第2層遺物包含層・第3層生活基盤層・第4層基盤岩層に分けられ、そのうち埋蔵文化財の出土層は、第2層から第3層でアカホヤ火山灰の2次堆積層で形成されている。時期区分は、弥生期から近世期の間に相当する。第2層から第3層にかけて遺物が出土。遺構については、第3層から柱穴跡と性格不明土壙が検出された。



第4図 茶屋遺跡基本土層図



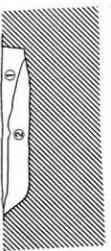
第5図 茶屋遺跡遺構平面図及び遺物分布図



- 20 -

第6図 茶屋瀬跡南西壁・南東壁土層断面図

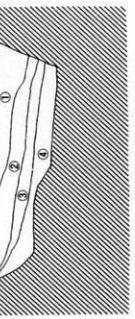
P 1 -



①	客土層 灰褐色	7.5YR 4/2	砂礫土
②	客土層 褐色	7.5YR 5/1	砂礫土
③	客土層 褐色、黄褐色	10YR 7/3	砂礫土
④	客土層 灰白	7.5YR 8/1	砂礫土

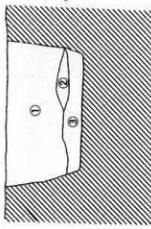
①	客土層 灰褐色	7.5YR 4/2	砂礫土
②	客土層 褐色	7.5YR 5/1	砂礫土
③	客土層 褐色	7.5YR 4/1	砂礫土
④	客土層 灰白	7.5YR 8/1	砂礫土

P 2 -



①	客土層 灰褐色	7.5YR 5/1	砂礫土
②	客土層 褐色	7.5YR 5/2	砂礫土
③	客土層 褐色	7.5YR 4/1	砂礫土
④	客土層 灰白	7.5YR 8/1	砂礫土

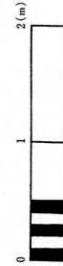
P 3 -

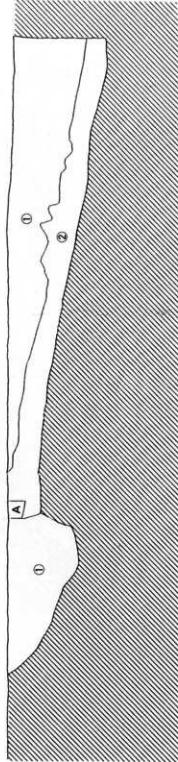
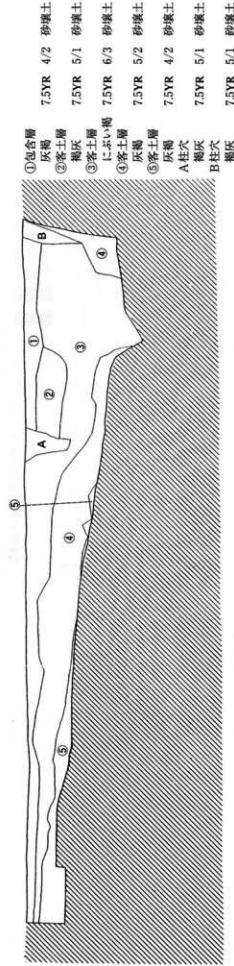


①	客土層 灰褐色	7.5YR 5/1	砂礫土
②	客土層 褐色	7.5YR 3/1	砂礫土
③	客土層 褐色	7.5YR 4/2	砂礫土
④	客土層 灰白	7.5YR 8/1	砂礫土

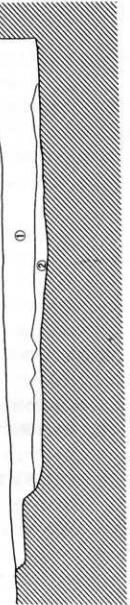
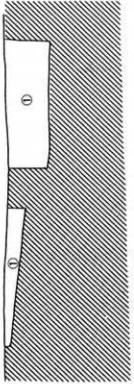
- 21 -

第7図 茶屋瀬跡土層断面図 (P 1・2・3)

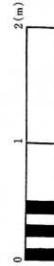




第8図 茶屋遺跡土層断面図(P4・5)



第9図 茶屋遺跡土層断面図(P6・7)



### 第3節 遺構

茶屋遺跡は、第2層～第3層にかけての生活基盤層からは、柱穴跡30・性格不明土壙5の遺構が出土した。

#### 柱穴跡（第4図）

調査地区の西側にまとめて柱穴が検出されている。北側には、祇肥街道が走っており柱穴は街道に伴う建物施設と推測される。総計30穴で大きさは、直径約20cm～90cm・深さ約10cm～20cmを測る。

#### 性格不明土壙（第4図）

調査地区には、SK1からSK5までの計5の性格不明土壙が掘り込まれている。SK1：北～南約16m・東～西約8m、SK2：北～南約7m30cm・東～西約2m10cm、SK3：東～西約2m30cm・北～南約1m60cm、SK4：東～西約1m・北～南約1m、SK5：東～西約1m・北～南約50cm、SK1～SK5の深さは約10cm～80cmを測る。

### 第4節 遺物

#### 弥生時代の土器（第13・14図）

- 1は、弥生土器の胴部で、調整は外面が横方向のハケ、内面が斜方向のハケを施している。
- 2は、弥生土器の壺の口縁部で、調整は外面が不定方向のハケ、内面が横方向のハケを施している。
- 3は、弥生土器の壺の胴部で、調整は外面が不定方向のハケナデ、内面がヘラ磨きを施す。
- 4は、弥生土器の壺の口縁部で、調整は外面が工具によるナデ・指ナデ、内面が不定方向のハケ目を施す。
- 5は、弥生土器の壺の肩部で、調整は外面がハケ・指による横方向のナデ、内面はハケによる斜方向のナデを施す。
- 6は、弥生土器で器種・部位不明で、調整は外面がハケによる不定方向ナデ、内面はハケによる斜方向のナデを施す。
- 7は、弥生土器の壺の肩部で、調整は外面がハケによる横方向ナデ、内面はヘラ磨きを施す。
- 8は、弥生土器で器種は不明、部位は胴部で、外面はハケによる斜方向ナデ、内面はハケによる不定方向ナデを施す。
- 9は、弥生土器で器種は不明、部位は胴部で、外面は横方向ナデ、内面は斜方向のハケを施す。
- 10は、弥生土器の壺の肩部で、外面はハケによる縦方向ナデ、内面は風化している。
- 11は、弥生土器の壺の体部で、外面はハケによる不定方向ナデ、内面はハケによる横方向ナデ・指頭痕を施す。
- 12は、弥生土器の壺の胴部で、外面はハケによる不定方向ナデ、内面はハケによる斜方向ナデ・指頭痕を施す。
- 13は、弥生土器の壺の肩部で、外面は指頭痕、内面はハケによる斜方向ナデ・指頭痕を施す。
- 14は、弥生土器の壺の胴部で、外面は風化、内面は道具による磨きを施す。
- 15は、弥生土器で器種は不明、部位は胴部で、外面は道具による磨き、内面はハケによる横方

向ナデ、道具によるナデを施す。

16は、弥生土器で器種は不明、部位は胴部で、外面は斜方向のハケ目、内面は横向のハケ目を施す。

17は、弥生土器で器種は不明、部位は胴部で、外面は風化、内面は道具による器面の押圧成形を施す。

18は、弥生土器で器種は不明、部位は胴部で、外面はヘラ削り・ハケ目、内面は摩耗していく不明。

19は、弥生土器で器種・部位は不明で、外面はハケによる斜方向ナデ、内面は摩滅。

20は、弥生土器で器種は不明、部位は胴部で、外面は風化していく不明、内面は指によるナデ・指頭痕を施す。

21は、弥生土器で器種は不明、部位は胴部で、外面はハケによる縦方向ナデ、内面は摩滅。

22は、弥生土器で器種・部位は不明、外面はハケによる斜方向ナデ、内面は摩滅。

23は、弥生土器の壺の口縁部で、外面は横方向のハケ目、内面は横・斜方向ハケ目を施す。

24は、弥生土器で器種・部位は不明、外面内面とも摩滅。

25は、弥生土器の壺の口縁部で、外面内面とも摩滅。

26は、弥生土器で器種は不明、部位は底部で、外面は指頭痕、内面は風化。

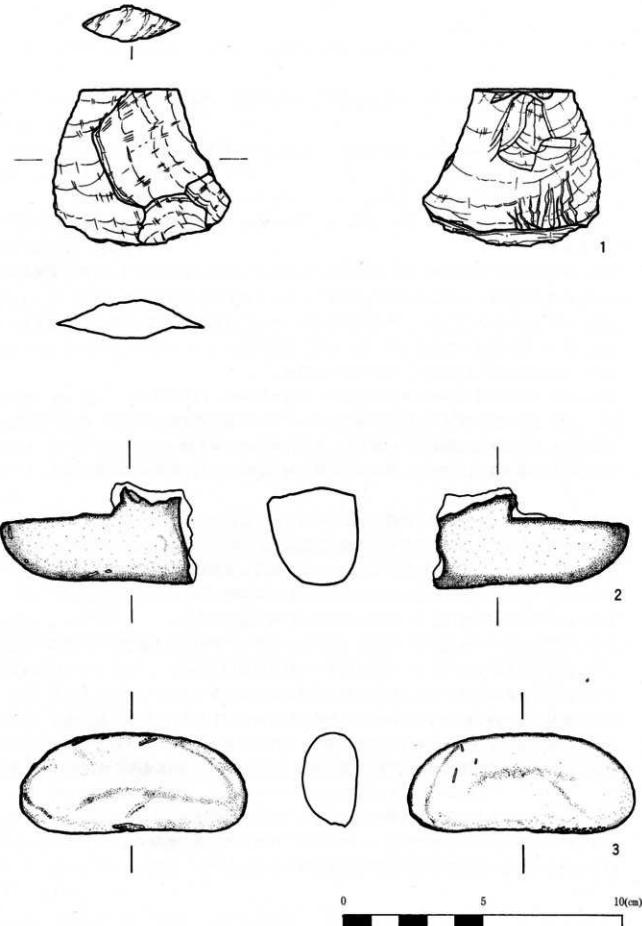
27は、弥生土器の壺の底部で、外面は横方向のハケ目、内面は風化。

28は、弥生土器の壺の口縁部で、外面内面とも横方向のハケ目を施す。

29は、弥生土器の壺の口縁部で、外面は成形痕・横方向のハケ目、内面は成形痕を施す。

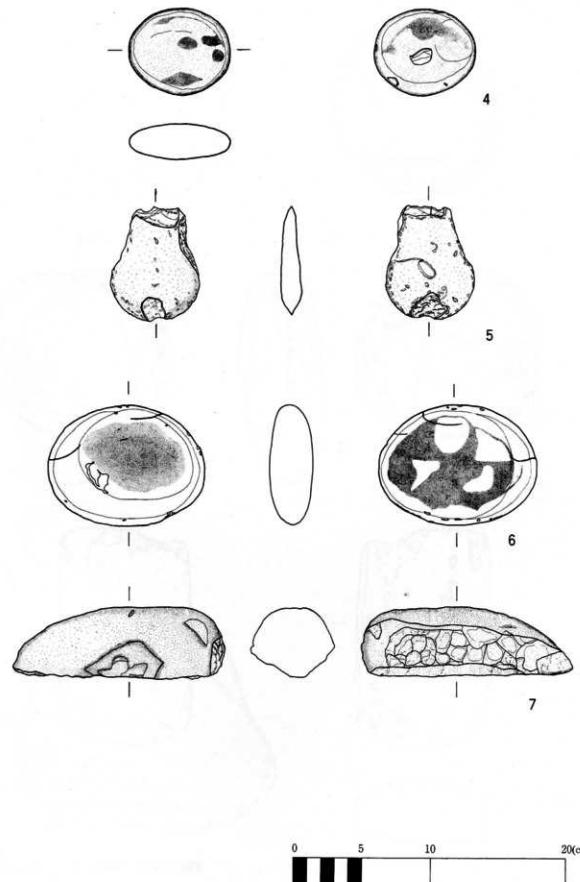
#### 弥生時代の石器（第9・10・11・12図）

- 1は、石核から石器を造る際の剥片の一部である。
- 2は、磨製石器で、全面的に表面が磨かれている。側面に使用時の打痕が観察できる。
- 3は、敲石で自然石を転用して、側縁に使用時の打痕が観察できる。
- 4は、敲石で自然石を転用して、側縁に使用時の打痕が観察できる。
- 5は、手斧で全面的に表面が磨かれ盤型を呈する。刃部の刃面中央に破損個所が観察できる。
- 6は、敲石で自然石を転用して、側縁に使用時の打痕が観察できる。
- 7は、凹石が半裁の状態で割れ、凹の部分で摩擦痕が観察できる。
- 8は、敲石で自然石を転用して、側縁に使用時の打痕が観察できる。
- 9は、石錐で扁平な自然石の両端に凹部を施し、石錐の機能を持たせた。
- 10は、磨製の片刃石斧が風化しており一部に磨製個所が残存し、刃部裏面に使用時の剥離痕が残る。
- 11は、敲石で自然石を転用して、側縁に使用時の打痕が観察できる。
- 12は、磨製の敲石で自然石を転用して、撥状先端に使用時の打痕が観察できる。
- 13は、台石で表面・裏面共に使用時の擦痕が観察できる。



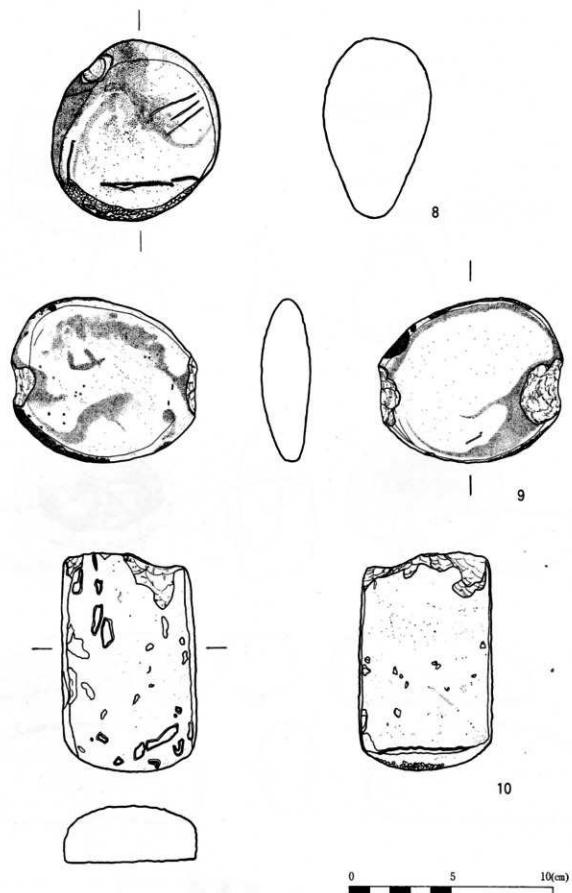
第10図 茶屋遺跡出土遺物実測図

- 26 -



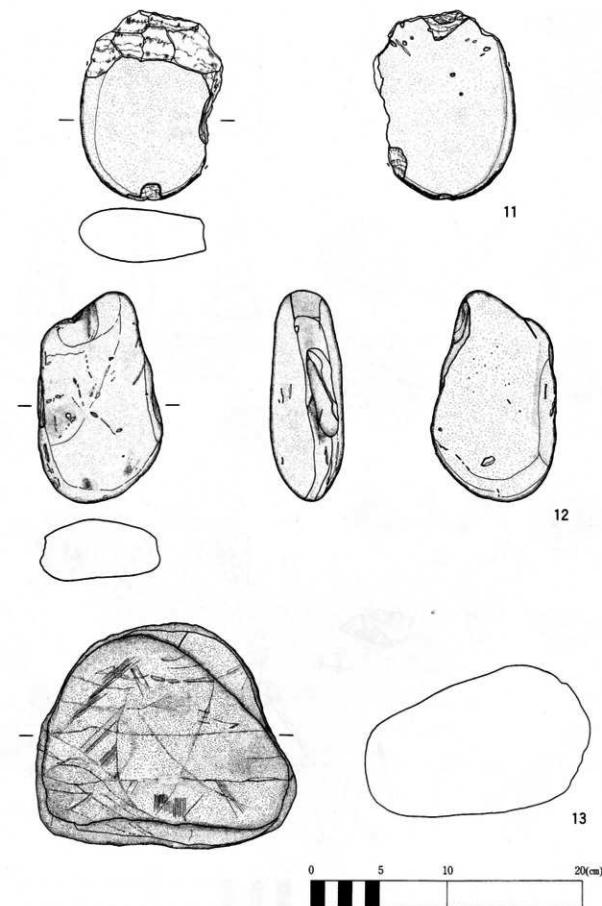
第11図 茶屋遺跡出土遺物実測図

- 27 -



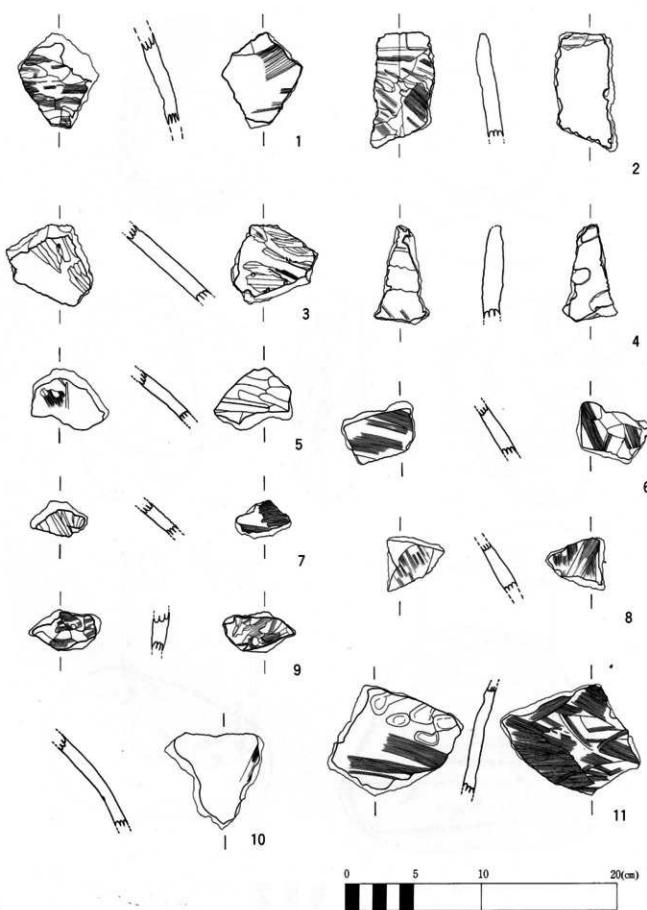
第12図 茶屋遺跡出土遺物実測図

- 28 -



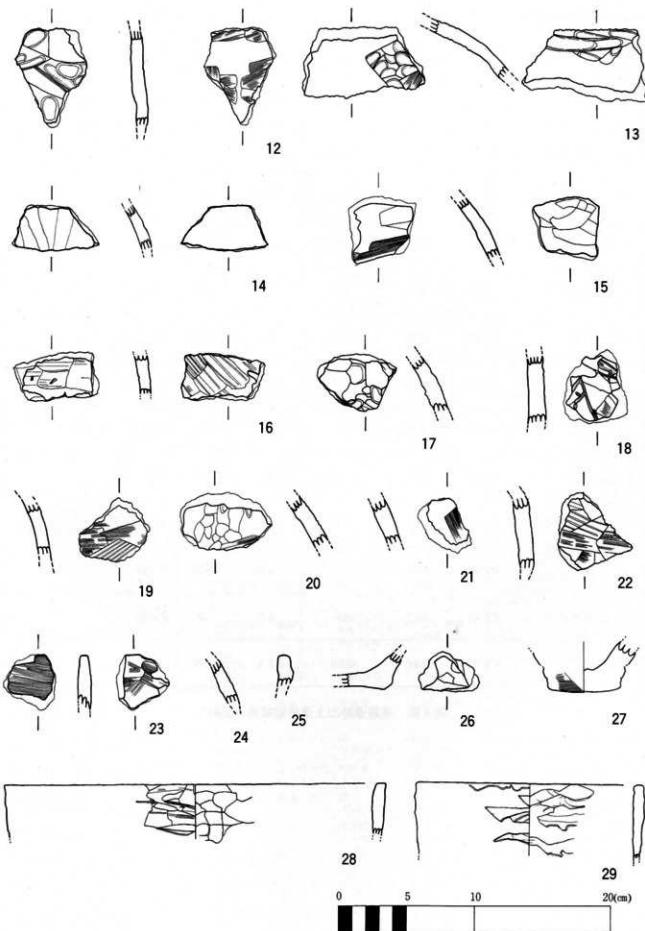
第13図 茶屋遺跡出土遺物実測図

- 29 -



第14図 茶屋遺跡出土遺物実測図

- 30 -



第15図 茶屋遺跡出土遺物実測図

- 31 -

報告書番号	器種	出土地点	計測値			重量(g)	石材	備考
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)			
1	石刃	CY-75	5.6	6.3	1.35	50	頁岩	
2	磨製石器	CY-77	6.9	3.65	3.1	90	砂岩	
3	敲石	CY-40	3.51	8.1	2.1	85	安山岩	
4	敲石	CY-29	6.4	7.4	2.6	180	安山岩	
5	磨製手斧	CY-36	8.1	6.4	1.9	120	砂岩	
6	敲石	CY-65	8.95	11.55	3.5	442.5	砂岩	
7	凹石	CY-72	5.25	15.6	5.5	520	砂岩	
8	敲石	CY-63	8.85	8.2	5.4	425	砂岩	
9	石錐	CY-62	8.0	9.0	2.4	245	砂岩	
10	柱状片刃石斧	CY-83	10.5	6.5	2.8	350	砂岩	風化している。 一部磨製石器が残る。
11	敲石	CY-38	13.4	9.2	3.85	800	安山岩	
12	磨製石器	CY-62	20.5	8.8	4.5	600	安山岩	
13	白石	CY-76	16.0	19.0	9.5	4100	安山岩	

第1表 茶屋遺跡出土遺物観察表(石器)

報告書番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径径 底径	成形・調整・文様など	色調			胎土の特徴	備考	
						外面	内面	外面			
1	弥生土器	不明 網部	CY-82		横方向のハケ目	にぶい橙 (SYR 5/4)	橙 (SYR 7/6)	橙 (SYR 7/6)	0.5~1.0mの大黒色鋸光沢・白色不透明 茶褐色の粘土物を含む。表面あり。	スヌ付着	
2	弥生土器	要 口縁部	CY-79		不定方向のハケ目	横方向のハケ目	明黄 (SYR 5/6)	橙 (7.5YR 5/6)	橙 (7.5YR 6/6)	微細~1.0mの大黒色透明白物を含む。0.5~3.0mの黑色・白色・白色の粘土物を含む。	
3	弥生土器	要 肩部	CY-51		不定方向のハケ目	ヘラ磨き	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (SYR 6/6)	1.0mの大黒色・灰褐色・黒色の岩片を含む。表面あり。		
4	弥生土器	口縁部	CY-25		工具による ナギ・ナギ	不定方向の ハケ目	明褐 (7.5YR 5/6)	橙 (SYR 6/6)	1.0~3.0mの大黒色・赤褐色・青色の岩片を含む。表面あり。微細な無色透明の粘土物を含む。表面あり。	スヌ付着	
5	弥生土器	肩部	CY-54		ハケによる 横方向ナギ	ハケによる斜 方向ナギ	明黄橙 (10YR 6/6)	橙 (7.5YR 7/6)	微細~1.0mの大黒色・白色不透明の岩片を含む。表面あり。		
6	弥生土器	不明 不明	CY-56		ハケによる不 定方向ナギ	斜方向ナギ	浅黄橙 (10YR 7/6)	にぶい橙 (10YR 7/3)	微細な無色透明の粘土物を含む。表面~1.5mの大黒色・黑色・赤褐色の岩片を含む。表面あり。		
7	弥生土器	茎 肩部	CY-55		ハケによる 横方向ナギ	ヘラ磨き	にぶい黄 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 6/6)	微細~1.0mの大黒色・黑色・赤褐色の岩片を含む。表面~0.5mの大黒色半透明の粘土物を含む。金色の斑点あり。		
8	弥生土器	不明 網部	CY-66		ハケによる不 定方向ナギ	斜方向ナギ	灰青褐 (10YR 5/2)	青黄 (10YR 8/6)	微細~1.0mの大黒色・白色半透明の粘土物を含む。0.5~3.0mの白色・赤褐色の粘土物を含む。表面あり。		
9	弥生土器	網部	CY-52		横方向のハ ケ目	横方向のハ ケ目	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	橙 (7.5YR 6/6)	微細~1.0mの大黒色・白色半透明の岩片を含む。表面あり。		
10	弥生土器	茎 肩部	CY-57-60		ハケによる 横方向ナギ	風化してい る	明黄橙 (10YR 7/6)	にぶい黄 (10YR 6/4)	微細~1.5mの大黒色・透明・白色半透明、黑 色半透明の粘土物を含む。0.5~3.0mの大 黒色・白色・褐色の岩片を含む。表面あり。		
11	弥生土器	茎 全体	CY-54		ハケによる不 定方向ナギ	ハケによる斜 方向ナギ	にぶい黄 (2.5Y 6/4)	黄 (7.5YR 7/8)	微細~2.0mの白色・黑色・不透明、表面のある 不透明・黒色の岩片を含む。表面あり。		
12	弥生土器	網部	CY-53		ハケによる不 定方向ナギ	指頭痕ナギ	浅黄橙 (7.5YR 5/4)	橙 (7.5YR 6/8)	0.5~1.0mの大黒色・白色・褐色の岩片を含む。表面半透明の粘土物を含む。白色半透明の岩片を含む。表面あり。		
13	弥生土器	茎 肩部	CY-80		指頭痕ナギ	指頭痕ナギ	にぶい黄 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	微細~1.5mの大黒色・透明・白色半透明、黑 色半透明の粘土物を含む。0.5~1.0~3.0m的大 黒色の灰褐色の岩片を含む。		
14	弥生土器	茎 肩部	CY-52		風化してい る	道具による 磨き	灰白 (2.5Y 8/1)	淡黄 (2.5Y 8/3)	微細~1.0mの大黒色・半透明・黑色半透明、黑 色半透明の粘土物を含む。表面あり。		
15	弥生土器	不明 網部	CY-41		道具による 磨き	道具による斜 方向ナギ	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄 (2.5Y 8/4)	微細~1.0mの大黒色・透明・白色半透明、黃 色の半透明の粘土物を含む。表面半透明の岩片を含む。表面あり。		
16	弥生土器	不明 網部	CY-50		斜め方向の ハケ目	横方向のハ ケ目	浅黄 (2.5Y 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	微細~1.0mの大黒色・透明・白色半透明、黑 色半透明の粘土物を含む。0.5~1.5mの大 黒色の灰褐色の岩片を含む。	スヌ付着	
17	弥生土器	不明 網部	CY-70		風化してい る	道具により器 皿を削り成形	道具による斜 方向ナギ	明褐 (7.5YR 5/6)	明褐 (7.5YR 5/6)	微細~0.5~1.0mの大黒色透明白物を含む。表面半透明の粘土物を含む。表面あり。	
18	弥生土器	不明 網部	CY-58		ヘラ削り ナギ	磨削してい て不明	橙 (7.5YR 6/6)	明褐 (7.5YR 5/6)	微細~0.5~1.0mの大黒色・白色・褐色の岩片を含む。表面半透明の粘土物を含む。表面あり。		
19	弥生土器	不明 不明	CY-64		ハケによる 斜方向ナギ	磨減してい て	灰 (2.5Y 5/2)	にぶい黄 (2.5Y 5/3)	1.0~2.0mの大黒色・褐色・赤褐色の岩片を含む。表面半透明の粘土物を含む。		
20	弥生土器	不明 網部	CY-68		風化してい て不明	指によるナギ 指頭痕ナギ	明褐 (7.5YR 5/6)	明褐 (7.5YR 5/8)	微細~4.0mの大黒色・灰色・白色不透明 の岩片を含む。微細~0.5~2.0mの大黒色・黑 色半透明の粘土物を含む。表面あり。		
21	弥生土器	不明 網部	CY-46		ハケによる 斜方向ナギ	磨減してい て	灰灰黄 (2.5Y 5/2)	にぶい黄 (10YR 6/3)	微細~0.5~2.5mの大黒色・白色・褐色の岩片を含む。表面半透明の粘土物を含む。		
22	弥生土器	不明 不明	CY-51		ハケによる 斜方向ナギ	磨減してい て	橙 (7.5YR 6/8)	浅黄 (5Y 7/3)	微細~2.0mの大黒色・白色不透明の粘土物を含む。表面半透明の粘土物を含む。	スヌ付着	
23	弥生土器	茎 口縁部	CY-57		横方向のハ ケ目	横・斜方向 のハケ目	明灰黄 (2.5Y 5/2)	明黄褐 (10YR 6/6)	微細~0.5~2.0mの大黒色・白色の岩片を含む。		
24	弥生土器	不明 不明	CY-37		磨減してい て	磨減してい て	橙 (7.5YR 7/8)	明褐 (7.5YR 7/6)	微細~1.0~1.5mの大黒色・白色・褐色の岩片を含む。表面半透明の粘土物を含む。表面あり。		
25	弥生土器	茎 口縁部	CY-2		ハケによる 斜方向ナギ	磨減してい て	浅黄灰 (2.5Y 5/2)	にぶい黄 (10YR 6/3)	微細~1.0~1.5mの大黒色・白色・褐色の岩片を含む。表面半透明の粘土物を含む。		
26	弥生土器	不明 不明	CY-30		指頭痕ナギ	風化してい る	にじ黄 (2.5Y 6/4)	オーライブ (5Y 7/6)	微細~1.0~1.5mの大黒色・褐色・赤褐色の岩片を含む。表面半透明の粘土物を含む。		
27	弥生土器	茎 底部	CY-43 (5.2)		横方向のハ ケ目	風化してい る	橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (5YR 6/4)	微細~3.0mの大黒色・褐色・赤褐色の岩片を含む。表面半透明の粘土物を含む。		
28	弥生土器	口縁部	CY-67 約25		横方向のハ ケ目	横方向のハ ケ目	灰(N 5/ ) 黄(N 5/ )	褐 (10YR 6/6)	褐 (10YR 6/6)	微細~0.5~1.0mの大黒色・白色・褐色の岩片を含む。表面半透明の粘土物を含む。表面あり。	
29	弥生土器	口縁部	CY-51 (18.6)		度強め、直方 向のハケ目あり	度強め、直方 向のハケ目あり	橙 (7.5YR 6/6)	褐 (10YR 6/2)	微細~1.0~1.5mの大黒色・白色の岩片を含む。表面半透明の粘土物を含む。表面あり。		

第2表 茶屋遺跡出土遺物観察表(土器)

### 第3章　まとめ

茶屋遺跡の調査では、遺構は主に第3層の生活基盤層から柱穴30・性格不明土壙5の遺構の計35遺構が検出され、遺物は、瓦1点・弥生土器56点・弥生石器46点の計103点が出土した。

遺構・遺物を検出・出土した調査地は、佐土原丘陵北西側先端部の一画を占め標高約50mの地点に位置する。調査地の西側沿いには、近世期に使用された飫肥街道と茶屋村跡があった。当時、飫肥街道を通って佐土原城下に入るに旅人は一時休息をとり、その休息者に食事やお茶をもって接待し、休む場を提供することで生活の生業としていた人々が集まって1つの町屋を形成していた。町屋は、通称“茶屋町”と呼ばれていた。

今回の調査で第3層の生活基盤層から出土した柱穴・性格不明土壙の遺構は、遺物の出土状況から弥生期以降の建物・遺構と推定できる。遺物は、アカホヤ火山灰（北側丘陵地からの流れ込み）の2次堆積層の中に包含されており、この堆積層に掘り込まれた柱穴・性格不明土壙内からは遺物は出土していない。弥生期の土器・石器は、調査地の北側丘陵地上のアカホヤ火山灰層で弥生期に営まれた生活跡の流れ込みの堆積物と想定される。従って、遺構については弥生期以降に造られた建物施設と推測されるが、時代は特定できない。

総じて、茶屋遺跡の出土状況から読み取れる事は、生活基盤層はアカホヤの2次堆積上に形成されその上に弥生期以降の建物遺構や土器・石器が出土している。但し、遺物は遺構に供伴していないので弥生期に造られた施設とは断定できなく、少なくとも弥生期以降の遺構と推測できよう。なお、“茶屋町”に関する遺構や遺物は、今回の調査では確認できなかった。

### 報告書抄録

ふりがな	ちゃやいせき
書名	茶屋遺跡
シリーズ名	佐土原町文化財調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	佐土原町教育委員会
所在地	〒880-0297 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下田島2066番地
発行年月日	2002年(平成14年)3月31日
ふりがな 所収遺跡名	ちゃやいせき 茶屋遺跡
ふりがな 所在地	さどわらちょうおおあざかみたじまあざやや 佐土原町大字上田島字茶屋
遺跡番号	3005
調査期間	平成12年10月23日～11月10日
調査面積	225m <sup>2</sup>
調査原因	携帯電話無線基地局建設

宮崎県佐土原町文化財調査報告書第22集

茶屋遺跡

2002年3月31日

編集・発行 宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会  
〒880-0297 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下田島20660番地  
TEL 0985-73-1111

印 刷 (株)印刷センタークロダ  
〒880-0022 宮崎市大橋2丁目175番地  
TEL 0985-24-4351

